

## I 事業の概要(地域の実情含む)

本校の学区である一関市川崎町は、北上川・砂鉄川・千厩川の合流地点にあり、カスリン台風(S22)・アイオン台風(S23)・台風6号(H14)で大きな被害を受けるなど、歴史的に水害に苦しんできた地域であり、北上川流域交流Eポート大会など、川との共生を図る活動も積極的に行われている。



本校では、中学生を地域防災の担い手として育成したいと考え、「助けられる人から助ける人へ」というテーマで防災学習に取り組んでいる。中学1年生は1学期に過去の災害の歴史について学び、防災学習の必要性について理解したのち、2学期に全校縦割り班で地域の防災について知り・考えるという展開は今年度も継続しつつ、本事業では川崎小学校や川崎保育園、川崎町内の関係諸機関や地域住民との連携・協力を図ることで、テーマに迫る防災学習を展開したいと考えた。

## II 取組の概要

### 1 地域の関係機関と連携した中学1年防災学習 ～過去の災害について学ぶ～(6～7月)

7月の1学年(中学校)研修などの機会を活用し、1年生は1学期に以下の学習を行った。2学期の全校防災学習に向けて生徒のレディネスをそろえるため、防災センターなどの関係機関と連携して学習を進めた。

- ・東日本大震災の記録DVD鑑賞
- ・川崎の水害の歴史(講師:防災センター金野氏)
- ・岩手宮城内陸地震・災害遺構見学(祭時大橋)と経験者の講話(講師:まつるべ温泉かみくら佐藤氏)
- ・「北上川学習交流館あいぽーと」見学

(中学生の感想から)

・洪水や台風など、写真を見て驚いた。被害が大きかったり、初めて聞いた言葉があったり、もっと知りたいと思った。



・折れ曲がった橋や崩れた山、割れた道路が地震の大きさを物語っていて、地震ってこんなに被害をもたらすんだと思うとすごいなと思いました。亡くなった人もいとなると、とても大変なことだし、震度6強となるとたくさんの方がいろいろな被害を受けたと思います。今回で聞いたこと、見たことを忘れずに、いつくるかわからない地震にもっと備え、もっと真剣に改めて考えたいです。

・私は、佐藤さんのお話を聴いて、自分の生活がどれだけ幸せか改めて気づきました。お話の中で印象に残ったのは、避難訓練の大切さ、声を掛け合うことの大切さです。普段、しっかり避難訓練をしているからこそ、「かみくら」のお客さんや従業員の方々が助かったし、声を掛け合ったから、地元のおじいちゃん、おばあちゃんも避難できたので、自分も何かあったとき実行できるように、普段から避難訓練なども集中して、手を抜かずに行っていきたいです。

### 2 行政区長さんに講師をお願いした全校(中学校)防災学習～フィールドワークと防災マップ～(9月)



昨年度行った「防災マップづくり」の発展として、川崎町の 26 行政区の区長さん（または自治会役員さんなど）を講師として、自分の家のある地区を実際に歩いて調べる地域学習（フィールドワーク）を行った。実際に歩いてみると、地図ではわからなかった場所や施設がたくさんあり、生徒たちにとっては発見の多い、大変有意義な学習となった。実際に歩いて学んだことをもとに、昨年度の防災マップをさらに進化させることができた。



（中学生の感想から）

・自分の住んでいる地区には、様々な仕組みがあることが分かった。排水するための、堤防につながる水路が2本あったり、本町の鉄でできている水門が開閉したり、岩盤があることで地震をやわらげたり…。災害を防ぐための工夫がたくさんされていることが分かった。また、地区の高齢者の方の家も知れたので、これからはその方たちの手助けもしていきたいと思った。

・銅谷沢に砂防ダムがあったと初めて知った。栃木の沢があふれたとき、自動販売機や電柱が倒れたというのには驚いた。砂防ダムや2つの沢を実際に見ることができたと、どこらへんまで水が来たかとか知れた。実際に行くことで想像しながら話が聞けた。



・自分の家は土砂崩れが起きる可能性があることを知った。説明を受け、災害を防ぐための道具は実は身近にあって驚きました。針山では長屋が流されたり、自分たちが歩いてきた道が水害の時水で埋まっているのを聞いて、ぞっとした。



3 川崎小学校と連携した防災学習発表会（10月）  
フィールドワークで行政区長さん等から学んだことを小学生にも伝えようと、川崎小学校の5年生、6年生を中学校に招待して、中学生が小学生に伝える「防災学習発表会」を行った（フィールドワークの講師や地域の関係機関・保護者も招待し、参観していただいた）。8つのグループに分かれて、ポスターセッション形式での発表とした。中学生たちは、「防災マップ」や、撮影した写真を使って、小学生にわかりやすく伝えようと工夫して発表していた。小学生の聴く態度がとても積極的で、質問もたくさん出してくれたので、盛り上がる発表会となった。参観した保護者の方が、「親よりも中学生のほうが地域のことを知っていると感じた。家に戻ったら、ぜひ、今日発表したことを親にも話してほしい。」と言っていたのが印象的だった。



（中学生の感想から）

・小学生や地域の方は熱心に考えてくれて、質の良い質問まで出してくれたのでうれしかった。発表した甲斐があった。こ

れて災害への対策は完璧だとは言えないけど、聞いてくれた人たちの参考にすこしでもなれたらな、と思う。

・今日、自分たちの発表をしながら、改めて自分の地域について知ることができた。洪水が来た時には上に逃げたくなるけど、横に逃げなければいけないということを頭に入れておきたい。また、「百聞は一見にしかず」と言っていたグループがあり、本当にその通りだと思った。自分の目で地域を見つめたいと思った。

・発表会ではなるべく小学生にわかりやすいように伝えられるように頑張りました。また、時間にも気を付けて、話すスピードを意識したりと注意すべき点を考えて取り組みました。地図や写真をさらにわかりやすく活用するのを重点として、勉強になりました。



(小学生の感想から)

・とても分かりやすかったです。土砂崩れが起こりやすい地域だとわかりました。いろいろな設備があるとわかり、対策をちゃんとやっていると学びました。

・自分の地区のことをもっと知ろうと思いました。ボートで避難をしていたことを初めて知りました。大火災が起きたときはたいへんだっろうなと思いました。ありがとうございました。

・小学生がわかりやすいように発表してくれたので聴きやすかったです。そして、高成は沢が多いことがわかりました。高成の特徴を付せんで表しているところが見やすかったです。

・地図の特徴や田、畑を色で表しているのがよいです。とても聞こえやすい声でよかったです。そして、聞きやすい内容でした。臨機応変に対応しているのがすごいと思いました。

#### 4 防災学習・生徒感想集の発行 (10月)

上記1～3の防災学習では、たくさんの関係諸機関や地域住民の方にご協力をいただいた。感謝の気持ちとともに、防災学習で中学生がどのように感じ・考えていたのかをお伝えし、今後も協力をお願いしたいという気持ちを込めて、生徒感想集を作成し、協力していただいた方々に配布させていただいた。

#### 5 川崎保育園と合同で実施した防災訓練 (11月)



隣接する川崎保育園と合同で防災訓練を行った。内容は「避難訓練 (地域避難所である川崎中学校への保育園児の避難を、中学生が誘導する)」と、「煙体験 (火災時を想定し、園児と中学生と一緒に煙の中を避難する)」の2つ。昨年度は怖がって煙体験ができなかったのに、今年は中学生と一緒にスムーズに実施できた園児がいたり、終わって「楽しかった」「お兄さんやお姉さんが優しくかった」という園児の声が多く聞こえたりと、合同でやるメリットが中学校・保育園の双方にたくさんあると感じた。また、サポートしていただいた一関東消防署川崎分署の方からも「みんな真剣で、とてもいい訓練だった」と評価していただいた。



(中学生の感想から)

・今回初めてやってみて、煙体験の時に「しゃがんでね」とか「危ないよ」と言ったり、自分が誘導することの大変さ、大切さを知りました。自分の命を守るのはもちろん、家族・高齢者・小さい子などの命を守ってあげたいという思いがますます強くなりました。

・小さいので足元に注意して歩いてあげたり、自分も小さくなって傘をさしてあげたりした。火災のアナウンスが流れたとき、保育園児が反応していたので、災害が起こった時は安心させてあげたいと思う。

・初めてのことなので少し不安もあった。でも、園児たちがとてもよい子だったので、初めてだったけどやりやすかった。防災訓練でこんなことを言ってはダメな気はするが、正直言って楽しかった。もし災害が起きたら本気で守ろうと思った。

・園児と一緒に逃げるときは、自分のペースではなく、園児に合わせてあげることが大切だし、手をつないでいると園児は安心することがわかった。煙体験の時など、教えながらできたのは良かったと思う。

・今回の防災訓練を小さい子供とやって、「助けられる人から助ける人へ」と変わったことを実感できたり、小さい子供と避難するとき、歩くスピードを合わせたり、気を楽にするために話しかけたりすることが必要だとわかった。

・園児のみんなと手をつないで歩いてみたりして、ゆっくりと歩かないといけないから、災害時は早めに行動を始めたほうがいいんだと思った。避難のことを考えると同時に、園児にも気を配らなければならないので大変だと思った。



### Ⅲ 取組の成果と課題

#### 1 成果

川崎小学校や川崎保育園、川崎町内の関係諸機関や地域住民との連携・協力を図ることで、「助けられる人から助ける人へ」というテーマに迫る防災学習を展開することができた。それぞれの取組での成果は以下のとおりである。

- (1) 1学期の1年防災学習を、地域の関係機関と連携して行うことで、1年生の防災への知識・意欲が高まったことはもちろん、「人とのかわりを通して学ぶ」という意識を育むことができ、その後の防災学習への前向きな態度につなげることができた。
- (2) フィールドワークの講師を各行政区長さんをお願いしたことで、地元の方しか知らない危険箇所や防災施設などを見学することができ、生徒はもちろん、教員にとってもたくさんの発見がある有意義な学習となった。「百聞は一見にしかず」と

いうように、決して忘れることのない体験となった生徒も多いと思う。

- (3) 発表会に「フィールドワークで学んだことを小学生に伝える」という明確な目的を与えることで、わかりやすい表現や発表を工夫するいい機会になった。また、「災害について語り継ぐ」ことの大切さに気付いた生徒もいた。さらに、講師の方や地域の方にも参加していただいたことで、中学生を地域防災の担い手として育てていこうという考えに共感してくださる方も多かった。
- (4) 生徒感想集をまとめ、配布したことで、川崎市民センターで行われた川崎町文化祭に「川崎中の防災学習について展示してほしい」という依頼を受けるなど、地域に広く伝えるきっかけとなった。
- (5) 保育園児の避難を助けるという体験を通して、「助けられる人から助ける人へ」というテーマの意味を理解した生徒も多い。また、園児も中学生と一緒にスムーズに訓練できるなど、双方にとって意味のある訓練となった。



#### 2 課題

- (1) 連携に伴う負担を軽減すること  
今年度初めて取り組んだことが多かつたため、事前の打ち合わせなどに時間を取られることがあった。特に行政区長さんには「事前打ち合わせ」「フィールドワーク」「発表会」と3回にわたってご協力をいただくことになってしまい、ご迷惑をおかけしたと思う。実践を積み重ねながら、負担の少ないやり方を模索していく必要がある。
- (2) 3年間を見通した計画を立案すること  
ひとりの生徒が中学校で学ぶのは3年間である。小学校・保育園・関係機関と連携を図るといふ方向性はそのままに、「毎年行うこと」「隔年で行うこと」「3年に1回行うこと」などを整理して、3年間を見通した防災学習計画を立案する必要がある。